

# 【ねがいましては】

平成25年3月22日

KYOWA SCHOOL

第269号

「野生の理」

『自分の人生は、自分のもので、どうするかは自分で考えなくてはいけない』 フィンランド教育が書かれている本の中の一節です。格差を教育の現場からなくすことで見えてきた、子供たちの中にある極普通の考え方です。

東日本大震災から丸2年が経ち、報道各局が被災を受けた方々に、ひとことを書いていただくシーンがありました。「歩みを止めない・・・」「ただ前を向いて歩くだけ・・・」 この2年間、必死に生きてこられた方々が口々にされる想いが表れていました。

どう生きるかを自身で想う、それは人が人であるための最低限必要な当たり前の責任であるように思えてなりません。その少しあと、他の局で就職活動についての番組を目にしました。ある大学4年生（男子）の取り組みをドキュメンタリー的に紹介していました。その方の就職に対しての条件が、「自宅から通勤可能なところ」でした。それを見、わたしは心の中に冷や汗が流れるのを感じました。どことなく目がうつろな雰囲気、活気がなく感じるこの青年に、局の方々が真剣な口調で語りかけていました。

どこがおかしいの・・・とお感じになる方もあるかと思いますが、私の中では自宅から離れられないことを条件にした就職活動に、『甘え』しか浮かんできませんでした。そこに介護が必要な方がいらっしやるとか、離れられない現状があるのならわかりますが、日本における就職活動のひとつに、同じ日本人として恥ずかしい気持を味わいました。

先に書かせていただいた『自分の人生は・・・』は、フィンランドでは小さい頃から普通に行きわたっている感情だそうです。教育の現場で当然のごとく教師から、親からそそがれる教えになっているそうです。

よく「ねがいましては」に書かせていただくことの中に、『自身を真正面から見つめる勇気を持つ』があります。だれの援助もなく、本気になる必要があると思っています。

日本ですと、ほぼ100%に近い子どもたちが勝ち負けにこだわります。どうあるべきかは、勝てばよいわけです。かなり単純に自分の生きるべき道ができあがります。中学生でしたら、目標とする高校に合格すればよいわけです。しかし、中学校側との3者面談では、かなり高い確率で目標校を下げるよう指導されるケースが多いようです。

合格は勝利、不合格は敗者。真に問われるべきは、その子の目標としたものがあれば、その意思を変化させることなく、目標に向かってどう生き抜いたか・・・そこに人としての価値があるわけであり、合格したから勝者であるという、ある種の固定観念は捨てるべきであると思います。

合格すれば、そこで歩みを止めてしまいます。不合格になれば、さらに自身を高めようと真正面から自分の見つけ直しを行うと思います。そして味わった悔しさをバネに、すぐさま歩みを開始すると思うのです。自分にかけていたものは何なのか、自分に必要とされるものは何なのか。つまりどう生きてゆくべきなのかを真剣に考えることになります。

「このように生きなさい。」という命令だけでは、いざ失敗が訪れたとしても、その責任を他人に転嫁してしまいがちです。それが今の日本ではなりがちだと思っています。杓子定規な世の中といわざるを得ません。仕方のないことなのかもしれません。

自分はどうあるべきなのか、このことを真剣に考えることから離れていってしまうしくみが出来てしまっている。大切なことは、自分はどのような色を持っているのか。自分はどのような道を歩むべきなのか。そのことをかなり小さい頃から考えるトレーニングをする必要があると思います。自分の考えで、自分の道を、ただひたすらに歩んできた。

小田和正さんの詩にも似たものがあります。『自分の生き方で 自分を生きて 多くの間違いを 繰り返してきた』そして最後に大切なものを見つけます。『いちばん大切なものは その笑顔 あの頃と 同じ』

家族のあり方に深く根ざしたものを見つけました。我が子を自らの生き方で生きさせてあげること、逃げを打っているときにはしっかりと叱咤激励し、そして多くの間違いを重ねる我が子を許容すること、そんな我が子を見ながら次第にわかってきた大切なこと、それは我が子が生まれたばかりの頃、見せてくれた笑顔。

家族の中に必要なもの・・・笑顔。我が子が必死に前を向いて歩もうとする姿。それが度重なる失敗であったとしても、誰もが認める真剣な歩みであったのであれば、そっと目を細くして見守る勇気をお持ちいただきたい。その勇気こそ子を持つ親の義務ではないでしょうか。その勇気を感じる時、家族が笑顔でいられるときではないでしょうか。

ある子は高校入試が終わっているにもかかわらず、高校の合格発表が終わっているにもかかわらず、その問題を解き続けています。真剣に生きようとする姿がそこにあります。その姿こそが今の日本に欠けている姿です。その姿をどうかご両親に見ていただきたいのです。

フィンランドの子どもたちからこぼれてくるひと言・・・「だって、先生にとっては他人事だからね」・・・素晴らしいひと言です。その心の裏側にあるしっかりとした柱・・・「自分のために学ぶのはあたりまえだから・・・」

子どもたちよ・・・学ぶって楽しむものなのですよ、あっちにぶつかりこっちにぶつかり、「えへっ、またやっちゃった、さあもう一回やってみよ・・・。」そんな姿をこれからも見させてください・・・ありがとう！